

経済為替ニュース

SUMITOMO MITSUI TRUST BANK, LIMITED FX NEWS

第2380号 2017年10月23日（月曜日）

《 more changes in Japanese political landscape 》

今回の選挙を見る視点として重要なのは、「これは日本の政界の大きな変化の、その第一幕に過ぎない」という点だろう。自公の連立与党に全体として惨敗した野党陣営には、再度の再編の動きが活発化するだろうし、自民党の支持率は高い水準を保っても安倍首相に対する国民の不支持率の高さ故に、「(森友・加計問題を含めて) 今回の選挙で安倍政権の過去が精算された」との国民感情は生まれまいだろう。

とするとやや遠い話になるが、それは将来の自民党の内部で「安倍疲れ」「安倍降ろし」の動きが生じ、それに希望の党の一部が参加する可能性もある。つまり筆者は日本の政界には大きな変化の第2幕、第3幕が待っていると考える。問題はそれがマーケットに影響を与えるかどうかだ。

22日投開票の衆議院選挙の結果は確定していないが（4議席が未定 離島分の開票の遅れなどから）、ほぼ大勢が判明していて第一党である自民党は単独で過半数（233）を上回り、さらに絶対安定多数（261）を確保した。23日朝現在では自民党の獲得議席は「283」となっている。同党と連立を組む公明党の議席（29）を合わせると、改憲の国会発議に必要な3分の2（310）を上回った。サンケイ新聞によると、「改憲」と言う視点で希望の党、日本維新の会の議席を単純に合わせると367となり、明確な護憲勢力の議席数67を大きく上回っている。

よって日本の政界では「改憲・加憲の流れ」は大きなうねりになったと言える。しかし各勢力で「憲法のどこをどう変えるか、どのような条項・項目を加えるのか」に関しては様々な意見があって、「改憲・加憲」勢力の中でも意見統一が出来ているわけではない。また憲法をいじる際には国会の三分の二の賛成に加えて、国民投票で賛成が反対を上回らなければならない。故に安倍首相の選挙結果を受けた関連発言も「(憲法改正に関しては) 野党の意見も聞きたい」と、どちらかと言えば低姿勢だ。国民目線を気にしていると言える。

野党第1党は立憲民主党となった。同党の獲得議席は23日朝現在で54となっており、この数字は今後増える可能性が高い。無所属で当選したものの、思想・心情が近いことを理由に同党に加わる議員が出てくる可能性が高いため、同党の衆議院での議席は60に接近する可能性もある。

しかし参議院には立憲民主党の議員はいない。今回の選挙公示数日前の設立だからだ。参議院にいるのは民進党の議員達だが、このねじれは早急に解消されねばならない。衆議院選挙で民進党は前原代表を中心に執行部が「希望の党への合流」を計ったため。しかしその戦略は明確に失敗したと言える。前原代表には辞任論も出ている。その上で、民進党再結集論もあるが、立憲民主党を立ち上げた枝野代表は「後戻りはしない」と言っている。それはそうだろう。勢いを失った政党名に戻っても何もプラスはない。デジャブと疲れが残るだけだ。恐らく立憲民主党はそのまま進む。

希望の党は、本来ならフレッシュさと勢いで選挙前の勢力（57）の倍増、三倍増を狙って、一時は「政権奪取も」とまで言われたが、「希望」の名にふさわしくなく、あたかも疲れ果てた政党のように惨敗した。増やすどころか獲得議席を 23 日朝現在で 49 に減らした。小池代表自身が「完敗だった」と言っている。注目された東京 10 区（小池代表の元選挙区 最側近の若狭勝氏が再選を目指した）では議席確保が出来ず。党全体の劣勢の典型となった。

希望の党の源流は「都民ファーストの会」に辿ることが出来るが、その東京の小選挙区で希望が勝てたのは東京 21 区の一区に過ぎない。神奈川でも 9 区一つだけ。同党が小選挙区で多くの当選者を出したのは愛知で、つまりこれは旧民進党系の議員が連合の支援を受けて当選したケースが多いことを示している。

希望の党の大失速は、良く言われる小池代表の「リセット」以降の一連の乱暴な言葉使い（「排除」がそのピークを形成 ご自身はパリで「それは私自身の奢りだった。反省する」と言っている）がよく指摘される。それはそうだろう。あの一連の言葉に小池代表の笑顔や緑のアタイアとは別の、高圧的で独裁的な側面を見た人は多い。

しかし筆者は「結局のところは、希望の党の立ち位置が最後まで明確ではなかった」ことに国民が気づいたのが大きかったのではないかと考える。全体的な政策は自民党とあまり変わりはないのに、「安倍一強からの転換」を主張。どちらかと言えばパーソナルの側面が前に出てしまって、政党のレーゾンデートルを明確には印象付けられなかった。共産党は一貫して「希望の党は自民党の補完勢力」と主張したが、それを否定する明確な材料はなかった。

希望の党の有力な候補者のかなりの部分は、前原・民進党代表の「合流方針」に従って希望の党の公認を得たが、そこには「踏み絵」が待ち構えていて、この古色蒼然とした言葉は国民に強い違和感を持たせた。踏み絵を踏まされた候補者に国民の積極的な支持が集まるとはどうい思えなかったが、実際にその通りになった。

その軛から脱するために、選挙戦の最中から憲法九条や安保法制に対する自らの意見（希望の党のそれとは異なる）を言い直す候補者が相次いだ。それがまた希望の党の掲げる旗やイメージを曖昧にした。恐らくこの党は「今後をどうする」という話になるだろう。待ち構えているのは分裂かも知れない。希望の党は選挙時点では、代表以外の役職が全く決まってもいなかった。そんな政党に国民が将来を託する訳がない。希望の党は 25 日に小池代表以外の役職を決めるそうだ。遅すぎる決定だと言えるし、すんなり決まるかどうか不明

だ。

《 no secured future for the Abe administration 》

マーケット的に見ると、一つの大きなポイントは「アベノミクスの継続」だと思う。つまり今までの日本の経済政策が「アベノミクス」という呼び方で続くということだ。そういう意味では「野党再編」は経済やマーケットにほとんど響かない。所詮は国会で三分の一以下の議席しか持たない政党同士の集合離散であって、しかも「野党」に分類されている希望の党は、実際には考え方（少なくともトップの）は限りなく自民党に近い。

その点から注目しておくべき存在は「立憲民主党」だろう。選挙戦に入るときの議席は16に過ぎなかった。それが23日の朝に確定した分で既に54に達し、「後からジョイン」すると見られる議員達を加えると実に60議席近くになる可能性がある。それは「4倍増」とも言える。

日本には「共産党の思想にはとうてい賛成できないし嫌いだが、自分の考え方は“リベラル”に分類できる、その“リベラル”でいたい、“リベラル”と呼ばれたい」という人々が身の周りにも多いが、今回はその種の人々の票がそっくり立憲民主党に集まったと見ることが可能だ。

実は同党が立候補者を揃えきれずに選挙に突入したことを考えると、実際には立憲民主党はもっと議席を獲得する下地はあったと見ることが出来る。故に、今後とも立憲民主党は今後の日本の政界でも存在感を示すだろう。

こうした勢力の主張は、枝野代表の言葉を借りてもそうだが、経済政策に関しては「格差是正」に向かう。その勢力が強ければ強いほど、やや疲れが見えてきたアベノミクスが今後修正に向かうとすれば「格差是正」の主張が加味される可能性がある。憲法改正で国民の支持が欲しい安倍政権も、立憲民主党の躍進は気になるだろう。

もっとも立憲民主党が当面保持するであろう60議席前後は、衆議院の全議席465のごく一部である。だから希望の党の一部が立憲民主に今後合流すると予想しても、彼等の勢力が“比較的弱い野党”にとどまる可能性が大きいし、その限りは日本の経済政策の大きな転換は予想されない。そういう意味で、野党再編はマーケットには影響はほとんどないと言える。

問題は自民党内の動きだ。今回の選挙で特徴的だったのは、自民党への支持の高さに比して、安倍首相本人に対する支持は必ずしも高くなかった点だ。それは「野党にはとても政権は任せられない。やはり人材を含めてリソースが豊かな自民党で」と国民の多くが思っていたことを示している。しかし一方で安倍首相本人の不支持率は高い。それは国民が安倍疲れ、安倍忌避の心理状態になっていることを示している。

その心理状態が再び蔓延してくると、「安倍さんでは国民の人氣がなさ過ぎる」「そろそろ代わって貰った方が良い」という勢力が今後自民党内で生まれ、そしてそれが希望の党の一部と手を組むケースも考えられる。

「自民大勝」の選挙直後なので直ちにその動きが出るとは思えない。しかし国民の頭の中には、「もしかしたら今回の選挙はモリカケ問題をうやむやにするために仕組まれたのでは」という憶測はやはり残ったと見るのが自然だろうし、全野党は引き続きこの問題を国会の場で持ち出すだろう。選挙戦でも希望の党を含めて安倍政権に対する最大の攻撃の矢となっていたのは「モリカケ問題」だった。

多分安倍さんは「国民の信任を今回の選挙で得た」というスタンスだろうが、支持率が選挙後にしばらく時間を置いて再び急落すれば、その主張は通らなくなる。筆者がなぜ自民党の勝利の直後にも関わらず「安倍さんの今後」について懸念するかというと、国民の間に明らかに「モリカケ問題」が引っかかる存在として残り続けていて、またアベノミクスも当初の成果を国民にあまねく及ぼせない状況の中で「安倍疲れ」が見えていることがある。

この問題を一番端的に指摘しているのは、小泉進次郎筆頭副幹事長の次の一言だ。22日夜にNHKのインタビューで、「おごり、ゆるみだけではなくて、(国民の安倍政権に対する)飽きを感じた。だんだん飽きてきている。加計学園の問題を含めてまだまだ不信感をもっている方が全国で相当いる、というのを街頭演説で感じた」と語った。

また同氏は安倍晋三総裁の3選について、「政治というのは何がおきるか分からない。1カ月前にこういう構図の中で選挙が起こるとは誰が想像したか。それを考えれば、来年のことを話すのは早いのではないか」と述べている。これが自民党の中でどのくらいのモメンタムを持っているかは不明だ。しかし思い出せば、オーストリアでは31才の首相が誕生しそうだ。

安倍首相もおごってはいない。22日夜のテレビ朝日の番組で、立憲民主党が伸長していることについて問われ、「やはり私どもに対するまだ厳しい風が吹いている、私に対しても厳しい風が吹いている中において、そういう声を立憲民主党が吸収しているのだろうと思っている。いずれにせよ野党のみなさまとも建設的な議論を、政策論争を進めていきたいと思っている」と答えている。つい最近の安倍首相支持率の急落を呼んだ要因は「放漫な国会運営」とともに「モリカケ問題」だが、この問題がクリアにならない限り安倍政権の今後は安泰とは言えないと筆者は考える。

今のところ自民党の内部には「有力な安倍後継候補」はいない。しかし多分「自民党の中に手を突っ込む」ことで自分の首相の目が出てくると考えている小池・希望の党の代表などは「自民党を乗っ取る」または「自民党を割る」試みをするのが自然だ。その場合は「アベノミクスの次」が思考されることになり、それが「ユリノミクス」かどうかは知らないが、日本経済に対する「新たな考え方」が出てくる可能性がある。それに関してマーケットは強い関心を持つだろう。

《 Rex Tillerson might leave Trump administration 》

世界のマーケットを見ると、株式市場が相変わらず強い。特にニューヨークは日本時間の木曜日の夜、つまりニューヨーク市場の寄り前に先物が大きく下げる場面があって、アメリ

カのマスコミが少し騒いだ（確かダウで 200 ドル以上下げた場面もあった）が、その後現物市場がオープンしてザラ場の間に株価は戻した。木曜日のニューヨークの引けは 5 ドル強の上げ。それを受けた金曜日のニューヨーク市場の引けは 165.59 ドル高の 23328.63 ドルでの引け。むろん史上最高値。その他の多くの指数も史上最高値を付けている。まだ本格的ではないが、やや「高値波乱」の様相もある。

この週末控え金曜日のニューヨーク株の急騰は、その前日に米上院が 4 兆ドルの予算措置を 51 対 49 で可決したことを好感したもの。これは今後米政権・議会が抜本的な税制改革に動く可能性を示すもので、トランプ・ラリーの頃からの政権への期待が「いよいよ具体化か」との期待を生んでいる。ただし今までの米議会の動きは行ったり来たりで、このままスムーズに税制改正に繋がるかは不明だ。

トランプ政権は相変わらずがたがたしている。この週末には「ティラーソン国務長官が来年 1 月には辞任か」という観測が CNN などを中心に流れた。既に両者の関係の冷却化は広く知られた事実となっている。ティラーソン長官自身も、トランプ大統領のことを「moron」（愚か者、バカ）と呼んだことを否定していない。対してトランプ大統領はツイッターでティラーソン長官の仕事ぶりを揶揄している。

欧州ではイギリスの EU からの離脱交渉が「時間切れ」の危機に直面している。相変わらずメイ首相の辞任論も出る中で、EU とイギリスとの交渉はうまく行っていないと伝えられる。これも今週の焦点だ。またスペインのカタルーニャ問題に関しては、中央政府がカタルーニャに与えている自治権の剥奪や一部停止、改めての州における選挙を検討するなど、依然として緊張関係が続いている。

- - - - -

今週の主な予定は以下の通り。

- | | |
|-------------|---|
| 10月23日（月曜日） | 米9月シカゴ連銀全米活動指数
休場＝タイ、NZ |
| 10月24日（火曜日） | 東芝臨時株主総会（千葉・幕張メッセ） |
| 10月25日（水曜日） | 独10月Ifo景況感指数
米9月耐久財受注
米8月FHFA住宅価格指数
米9月新築住宅販売件数
英7～9月期GDP
ブラジル中銀政策金利発表 |
| 10月26日（木曜日） | 9月企業向けサービス価格指数
米9月中古住宅販売仮契約
ECB定例理事会（ドラギ総裁会見）（フランクフルト）
休場＝タイ |
| 10月27日（金曜日） | 9月消費者物価指数 |

米7~9月期 GDP

今回の衆議院選挙の結果が、マーケットに及ぼした最初の影響は円相場に対してだった。ドル・円は 114 円近くまで上昇した。その後は 113 円台のハイで推移している。株価の反応はこれからだ。

《 have a nice week 》

台風絡みの週末、皆様はいかがお過ごしでしたか。全くの雨続きで、「台無しだな」と思う週末でした。台風 21 号はこの文章を書いている時点でも、日本列島を抜けきっていない。東京も朝方まで激しい風と雨でした。日本列島はまだまだ大雨と風に警戒です。それにしても温度の変化が激しい。今朝起きたら気温は 23 度でした。つい数日前に日中の最高温度が 12 度という日を経験したばかりなので、「これは体調崩す人が出るだろうな」と思いました。皆さん、お気を付けて。

それにしてもこの雨と台風の影響を受けているのがセリーグの優勝チーム決定の為のファイナル・ステージ。広島は球場は屋根がない。なので、雨が強く降れば休止にせざるを得ない。21、22 日の両日が中止になり、屋根があるソフトバンクの本拠地で同チームが優勝したのに対して、セリーグは日本シリーズ進出チームの決定が遅れている。あと広島では少なくとも 2 試合が必要。日本シリーズは 28 日の土曜日からなので日程的には大丈夫でしょう。10 月にこれほど雨が続くとは関係者も予想していなかったのでは。

アメリカでも今は野球が一番面白い。応援していたアリーグのヤンキースがマー君の活躍にも関わらず負けてしまったのはちょっとガッカリ。1981 年以來のドジャース対ヤンキースの名門同士の対決を、しかも「ダルビッシュ対田中」の先発で見ようと思っていたのに。しかし今年これまでのポスト・シーズンを見ていて思うのは、日本人投手 3 人の防御率の凄さ。

田中	1. 3 8
ダルビッシュ	1. 4 2
前田	0. 0 0

前の二人は先発、前田はリリーフという差はあるが、この 3 人とも普段はあり得ない成績です。田中も前田も、そしてダルビッシュもチームを救っている。田中は今シーズンが終わってしまったが、ダルと前田については「続くのかな」「続いて欲しい」と思う。しかしこの 3 人は言ってみれば日本の球界を背負ってきた選手。「ここ」という勝負には高校時代から慣れていて、気持ちの持っていくようがうまいのかも知れない。アメリカには大きな、全国的な高校野球大会はないので。

これでまた日本人ピッチャーの評価が高くなるのでは。大谷ね.....。どうなるんだろう。二刀流？ 楽しみです。それにしても今回のリーグ優勝決定シリーズ第5戦では、アメリカ中のマスコミ、そしてかつての名選手がタナカを絶賛。本人も「自分を褒めたい」と。どこかで聞いた台詞だ。

ニューヨーク・タイムズなどは「ヤンキースを苦しめてきたカイクルをヤンキース打線がいかに打ち崩したか」を記事の中心を置いていたが、そうは言ってもあの試合は「タナカの試合」でしょう。見ていて本当に痛快だった。7回は本当に疲れているように見えたり、やっとな気持ちを投入して投げている。マー君が来年もヤンキースに残るのか知りませんが、とにかく良いピッチングを見せて欲しい。

それでは皆様には良い一週間を。

《当「ニュース」は三井住友トラスト基礎研究所主席研究員の伊藤(E-mail ycaster@gol.com)の相場見解を記したものであり、三井住友信託銀行の見通しとは必ずしも一致しません。本ニュースのデータは各種の情報源から入手したものです。正確性、完全性を全面的に保証するものではありません。また、作成時点で入手可能なデータに基づき経済・金融情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。投資に関する最終決定はお客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。》